ハンガリー語の副動詞構文について
－日本語の「テイル形」との対照から－

大　島　　一

0. はじめに

ハンガリー語には動詞の語幹に -va/-ve をつけることにより，「～しながら」という意味をもつ副動詞が存在する。本論ではこの副動詞及び，存在動詞 van と結びついて「～している」という意味をもつ副動詞構文を観察する。また日本語の「テイル形」についても言及し，その従来の分析方法を批判的に説明する。また対照研究として日本語の「テイル形」がハンガリー語テキストではどのような表現形式で出現しているかを調査する。

1．ハンガリー語の副動詞

1．1．副動詞の基本的用法

ハンガリー語の副動詞は動詞語幹に -va/-ve を付け，「～しながら」という意味を持つ。普通は「～しながら，...する」といったように使われることが多い[1]。

(1)

A	tévé-t	néz-ve	vacsoráz-om.
Det	テレビ-Acc	見る-Con	夕食をとる-1.sg.Indef

「テレビを見ながら夕食を取ります」

（深谷編，1982）

1．2　副動詞構文について

ハンガリー語の副動詞は上記の基本的用法の他に，「van（存在動詞）　副動詞」といった形式（以下，この形式を「副動詞構文」と呼ぶ）も見られる。

(2) Zöld-re　van　a　rácsos　kapu　fest-ve.
緑-sub　be　Det　四目格子の　門　塗る-Con
「その四目格子の門が緑に塗られている」

(Bencédy *et al.*, 1968)

この構造は字義どおり考えると，「van（存在動詞，イル，アル）＋ 動詞 -va/ve（〜して）」となるので，日本語の「テイル形」と同じ構造を成していると考えられる。これに接動詞（ハンガリー語の文法では igekötő と呼ばれるもの。例文内グロスでは "Prev"）[2]。がついた動詞（接動詞付き動詞）からの副動詞構文もある。

(3) a.　A　kapu　be　van　csuk-va.
Det　門　Prev　be　閉める-Con
「その門は閉まっている」

b.　A　kapu　be-csukód-ott.
Det　門　Prev-閉める-Past.3.sg.Indef
「門が閉まった」

(3a) は日本語の「閉まっている」という状況と全く同じで，門が閉められたその後の結果状態が焦点となっている。もし，瞬間的な動作，例えば，目の前で門が閉められてしまった場合を表わすには (3b)のように動詞だけで表現する（becsukódott「閉まった」）。

次に，日本語では瞬間的な動作とは考えられない動詞からの例を見てみる。

(4) Ki　van-nak　javít-va　a　dolgozat-ok.
Prev　be-pl　直す-CONVERB　Det　論文-pl
「その論文は直されている」

(5) A　Tisza　be　van　fagy-va.
Det　ティサ（川）　Prev　be　凍る-CONVERB
「ティサ川は凍っている」

(Bencédy *et al.,* 1968)

日本語で考えると，「直されている」「凍っている」も共に動作の進行中という意味として解釈することが可能であるが，このハンガリー語の文は両者とも結果状態をさしている。つまり，「論文が直された」「川が凍ってしまった」後の結果状態を表現しているのである。

以上の事からハンガリー語の副動詞構文は，進行的なものではなく，結果状態に属するものであるということがわかる。ハンガリーの国文法[3]においてこの表現は，“状態副分詞 (állapothatározói igenév)”と呼ばれることからもそれが伺えるが，実際の例でも，以下のような文は非文となることもそれを証明している。

(6) a. *össze　vol-t-unk　beszél-ve
Prev　be-Past-pl　話す-Con

b. össze-beszél-t-ünk
Prev-話す-Past-1.pl.Indef
「(我々は) 結託した」

(Bencédy *et al.,* 1968)

つまり，この副動詞は動作の結果状態を指すことのみに使用されるのであって，当該の動作やそのイベントの発生を表わすことは出来ないのである。

1．3　接動詞の有無からくる副動詞構文の意味の相違について

次にこの副動詞構文において接動詞の有無が両者の構造の意味をどのように変えるのかを，以下に見てみる事にする。

その前に，ここで問題となるハンガリー語の「接動詞」について説明する。

1．3．1 ハンガリー語の接動詞

ハンガリー語には接動詞 (igekötő)と呼ばれる文法要素が存在する。これは動詞の前に付き，動詞に様々な意味を与える品詞である。一般に接動詞は方向的意味をもっているものが多い。これは通事的にみて接動詞が場所の副詞や後置詞から発展して来たものだからである。

接動詞には以下のものがあるとされる：abba, agyon, alá, át, be, bele, benn, egybe, el, elő, előre, fel (föl), félbe, félre, felül (főlül), fenn (fönn), hátra, haza, helyre, hozzá, ide, keresztül, ketté, ki, körül, közbe, közre, külön, le, meg, mellé, neki, oda, össze, rá, rajta, széjjel, szembe, szerte, szét, tele, tova, tovább, tönkre, túl, újjá, újra, utána, végbe, végig, vissza

（A magyar helyesírás szabály ai（ハンガリー語正書法規則）による）

これらの接動詞の中では， be「～の中へ」，ki「～の外へ」，fel「～の上へ」，le「～の下へ」，el「～から離れて」，meg「(完了化)」は最も生産性の高いものである。以下にそれらの具体例を示す。

(7) Péter **be**-megy a ház-ba.
ペーテル Prev-行く.3.sg.Indef Det 家-Ill
「ペーテルは家の中へはいる。」

(8) Péter **ki**-megy a szobá-ból.
ペーテル Prev-行く.3.sg.Indef Det 部屋-Ela
「ペーテルは部屋から外へ出る。」

(9) Péter **fel**-megy.
ペーテル Prev-行く.3.sg.Indef
「ペーテルは上へ行く / 登る /（上京する)。」

(10) A diák-ok **le**-ül-nek.
Det 生徒-pl Prev-座る-3.pl.Indef
「その生徒たちは着席する。」

(11)　Péter　**el**-megy　a　szállodá-ból.
ペーテル　Prev-行く.3.sg.Indef　Det　ホテル-Ela
「ペーテルはそのホテルから出ていく。」

(12)　Talán　valami　hibá-t　követ-t-em　**el**?
たぶん　なにか　過ち-Acc　続く-Past-1.sg.Indef　Prev
「もしかしたら私はなにか過ちを犯してしまいましたか？」

(13)　Péter　**meg**-tanul-t-a　a　lecké-t.
ペーテル　Prev-勉強する-Past-3.sg.Def　Det　課題-Acc
「ペーテルはその課題を学んでしまった（そして覚えている)。」

例文を見てみると，(7)から(11)までは接動詞は場所的な意味を動詞に与えている。(12)は動詞 követ（～に続く）に接動詞 el（～離れて）が付いた接動詞付き動詞 el-követ であるが，その意味は「～を犯す」といったものになる。つまり接動詞と動詞の意味の総和から接動詞付き動詞の意味を引き出せない，意味派生の例である。一方，(13)の例にある接動詞 meg はその方向的意味を失い，単に完了の意味を動詞にもたらすことだけに機能している。基本動詞に接動詞 meg はなんの語彙的意味も与えず，ただ完了的意味を与えるということから，この接動詞 meg は完了相アスペクトの文法要素として認められる。

また接動詞は否定文や強調文の際は動詞から離れ別個に独立して書かれる事もある。例えば，上例では(12)において，強調要素の valami hibát（なにか過ち）があることにより，接動詞 el は動詞の直前の位置から離れ，後置されなければならない。

1．3．2　接動詞を使った副動詞構文

次の例は接動詞 be の有無でその意味が変わってくる例である。

(14=3)　a.　A　kapu　<u>be</u>　van　csuk-va.
Det　門　Prev　be　閉める-Con
「その門は閉まっている」

b. A kapu csuk-va van.
Det 門 閉める-Con be
「その門は閉まっている」

両者とも「その門は閉まっている」という意味を表わすが，(14a)の接動詞がついている例では，話題となっている門が開いていたことを事前に知っていて，それが閉じられてしまった状態に言及している（例えば，先程までは開いていたことを確認した学校の門などが，今は閉まっているという状況である）。一方，(14b)における接動詞のない例では，その門が開いていたかどうかわからない，ただ現時点で見る限り閉まっているという事実のみを指すという意味を持っている。

接動詞が関与するもので，モーダルな意味合いが強いと思われるものには以下のようなものがある。

(15) ..., hogy meg vagy-ok-e győződ-ve állítás-ai-m
～ということ Prev be-1.sg-～かどうか 確信する-Con 主張-pl-Poss.1.sg
igaz voltá-ról és javaslat-ai-m hasznosság-á-ról.
真の 価値-Del そして 提案-pl-Poss.1.sg 利用性-Poss.3.sg-Del
「...私の主張の真の価値について，そして提案の有効性について，私は確信しているかどうかという...」

(Népszabadság, 1994)

(15)の「確信している」では確かめた結果，ある考えに至り「確信した (meggyőződtem)」となり，その結果の状態において現在は「確信している」という事を意味している。この例文でもし動詞過去時制の meggyőződtem を使えば，その時一回限りの確信を示唆する事になるので，もしかすると，後で反論にあってその確信が揺らいだかもしれない。しかし，ここで結果状態の meg vagyok győződve を使うことにより，何度も何度も繰り返し自分の確信を維持（もしくは補強）してきたという強い意味合いを示すことが可能になる，というのである。このようなモーダルな意味合いもこの副動詞構文は持っている。日本語

でも，「分かる」と「分かっている」の区別に似たようなものだが，相手から自分が知らないことを説明されるとき，「わかる，わかる」と発話することはあっても，「わかって（い）る」と言う人はいない。もしそうすると「そんな事くらいわかってるから説明するな」という意味合いになる。そこで次ではこの日本語の「テイル形」の特徴について説明を試みる。

2．日本語の「テイル形」について

2．1　日本語における「テイル形」の分析（動詞分類）

これまで，日本語の「テイル形」についての研究は数多くなされてきたが，それらの基本的な分析は，金田一 (1950)の動詞4分類が始まりといえる。金田一の論をまとめると以下のように説明できる。

(16)　1．状態動詞（ある，いる，など）
　　2．継続動詞（読む，書く，降る，吹く，など）
　　3．瞬間動詞（死ぬ，消える，壊れる，割れる，など）
　　4．第4種の動詞（そびえている，すぐれている，など）

金田一は「テイル形」が付くかどうか，また付いた際の意味の違いなどからこのように動詞を4つのタイプに分類した。状態動詞は「テイル形」がつかないもの，継続動詞は「テイル形」がつくと動作の進行を意味し，瞬間動詞は「テイル形」がつくと結果状態を示す。最後の第4種の動詞は元々「テイル形」が付いた形で使われるものである。

しかしこの分類では様々な例外が出てくるということもあり，その後，数々の動詞分類に関する議論がなされた。最近の研究として工藤 (1995)による動詞分類がある。工藤 (1995)はまず動詞を「(A)外的運動動詞」，「(B)内的情態動詞」，「(C)静態動詞」の3つにわけ，このうち，「外的運動動詞」の動詞グループにおいてこそ“スルーシテイル”のアスペクト対立が，典型的なかたちで成立する（工藤，1995）と説明する。本論は「テイル形」の分析が目的であるので，この「外的運動動詞」のグループにのみ議論を限る事にする。

このグループはさらに以下のように下位分類される：

(17)　(A・1) 主体動作・客体変化動詞（開ける，折る，消す，など）
　　(A・2) 主体変化動詞（行く，来る，帰る，開く，など）
　　(A・3) 主体動作動詞（動かす，回す，打つ，蹴る，など）
（工藤，1995より）

「テイル形」での意味は，「主体動作・客体変化動詞」では動作継続（能動）または結果継続（受動）となり，「主体変化動詞」では結果継続，「主体動作動詞」は動作継続（能動・受動）を表わすとされる（工藤，1995)。また，限界・非限界的視点からいうと，「主体動作・客体変化動詞」と「主体変化動詞」は限界的であり，「主体動作動詞」は非限界的であるとされている。

例えば，「閉まる」という動詞は主体変化動詞で瞬間的な変化を表わす。そして「テイル形」がついた形の「閉まっている」はふつう結果継続を表わすことになる。

しかし，まれに変化（運動）の局面の意味を実現することもある。以下がその例である。

(18)　とびらがしまっていますから，むりな乗車はやめてください。
（高橋，1985）

例 (18)は，閉まるという瞬間を拡大したものであると，高橋 (1985)では説明されている。これは駅のホームでの電車乗車の際のアナウンスであろうが[(4)]，確かに，「閉まる」という瞬間変化の間に滑り込むように乗車することは不可能であるから，「瞬間を拡大したものである」として，閉まる瞬間に“なんとか”乗車させようとする，という解釈をせざるを得ないのである。

2．2　動詞分類からの「テイル形」分析の問題点

「とびらが閉まっている」は先行研究では結果状態を表わすとされるから，文脈なしで考えればこの文は扉が閉まった状態を意味する。しかしその解釈であるとすると，上述の「とびらがしまっていますから，むりな乗車はやめてください」では矛盾が発生する。現実には扉が閉まる前にアナウンスされるからである。一方で，もし「とびらが閉まりますから，むりな乗車はやめてくださ

い」というテイル形ではない，“閉まる”を使い，アナウンスするとなると，“閉まる”から，乗ってはいけないという警告にも解釈できる。したがって，「閉まる」を使った文では，「(無理な) 乗車」は不可能ということになる。先行研究における高橋 (1985)の「閉まるという瞬間を拡大したもの」という説明では問題が出てくる。

2．3　非限界的視点からの分析

では，「閉まっている」という「テイル形」にすることで，どうして乗車ができるようになるかという問題が存在する。これにはまず文を限界的 vs. 非限界的という観点から見ることが必要となる。以下ではまず先行研究を引用し，実際にこの「扉が閉まっている」という文を説明していく事にする。

2．3．1　Comrie (1976)

Comrie (1976)では，John is making a chair と，John is singing という二つの持続的な文における記述される意味とはその内部構造に違いがあるとする。「ジョンが椅子を作っている」という例では椅子を作ってそれが完成するという限界点 (terminal point)があるが，「ジョンは歌っている」ではジョンはいつ歌を止めても歌ったことになる。すなわち限界点が存在しない。よって，make a chair で記述される場面は限界的 (telic)といい，sing で記述されるものは非限界的 (atelic)という。

しかし，この二つの状況がすべて動詞のみによって決まるわけではない。Comrie (1976)で挙げられているように，上記の sing は非限界的状況を表わしているが，John is singing a song「ジョンは歌を歌っている」になるとこれは限界的に変わり，John is singing songs「ジョンは歌（複）を歌っている」ではまた非限界的になる。さらに，John is singing five songs「ジョンは5曲歌っている」になるとまた限界的に変化する。これらから言えることは：

(19)　…, situations are not described by verb alone, but rather by the verb together with its arguments (subject and object).

(Comrie, 1976)

つまり，状況は動詞のみではなく，周囲の目的語や主語といった項の特性によって変わってくるということである。

2．3．2　Kiefer (1982) における atelic entailment（非限界的推論）

上記の限界的，非限界的という観点からハンガリー語を分析した Kiefer (1982)では非限界的特性を持つ文では限界的のものでは持ってない，ある推論が働くという。Kiefer (1982) によれば：

(20) a. Anna　level-et　ír.
アンナ　手紙-Acc　書く-3.sg.Indef
「アンナは手紙を書いている」
b. János　ház-at　épít.
ヤーノシュ　家-Acc　建てる-3.sg.Indef
「ヤーノシュは家を建てている」

(Kiefer, 1982)

これらは無冠詞（ゼロ（ϕ）冠詞）目的語を使った文であり，atelic situation（非限界的状況）であると説明されている。そして，これらに不定冠詞 egy を付けると，telic situation（限界的状況）に変わる。

(21) a. Anna　egy　level-et　ír.
アンナ　Indet　手紙-Acc　書く-3.sg.Indef
「アンナは（ある）手紙を書いている」
b. János　egy　ház-at　épit.
ヤーノシュ　Indet　家-Acc　建てる-3.sg.Indef
「ヤーノシュは（ある）家を建てている」

(22) a. Péter　játsz-ik.
ペーテル　遊ぶ-3.sg.Indef
「ペーテルは 遊んでいる」

b. János　　fut.
　ヤーノシュ　走る-3.sg.Indef
「ヤーノシュは 走っている」

(Kiefer, 1982)

Kiefer (1982) では，(21)は telic（限界的）であり，一方(22)は atelic（非限界的）な状況を描写していると説明されている。つまり，telic の文では，その動作が終わらないまでは当該の文で述べられたことは真とはならない（つまり，(21a)の文はアンナが手紙を書きあげるといった限界点を持っていて，そこに到達するまでは「手紙を書く」ということにはならない。(21b)も同様である)。しかし，(22a,b)はそれとは異なる。つまり，もしその過程や動作が途中で妨げられても，“ペーテルは遊んでいる”，“ヤーノシュは走っている”と言うことができる。まとめると，「アンナは手紙を書いている」は「アンナは手紙を書いた」を含意しないが，「ペーテルは遊んでいる」は「ペーテルは遊んだ」ということを意味的に含んでいるのである (Kiefer, 1982)。この(20a,b)や (22a,b)がもっている推論を“atelic entailment（非限界的推論）”と言う。そして非限界的な状況において，この推論が発生するのである。

2．3．3　非限界的推論の「扉は閉まっている」への適用

これまでに説明して来た限界的，非限界的という観点から，そして非限界的推論を日本語の「扉は閉まっている」に対する有力な説明手段として考えてみたい。

このアナウンスの“とびら”は電車のことであるから，複数枚ある事が前提となる[5]。たった一枚の扉が閉まること，これは telic（限界的）なものであるが，複数枚あることで，この状況は atelic（非限界的）になるのである。そして“atelic entailment（非限界的推論）”では途中で動作が妨げられてもその動作は真であるから，電車の全車両の複数の扉を考慮した場合，無事に閉まる前に乗客が乗車している扉や，ぎりぎりで乗車された扉，または遅れてしまったため，身体やバッグなどが挟まってしまい，閉まらない扉など色々なケースが考えられるのである。しかし少なくとも無事閉まった扉が存在する。だからこそ，ここでは「閉まっている」という「テイル形」を使ってこの推論を引き出

す必要があったと思われる。また，このような状況だからこそ，注意としてアナウンスできるとも考えられるのである。

主語が不特定多数である非限界的状況での解釈は，単純にその動詞分類から引き出される意味では説明しにくいと思われる。工藤 (1995)もその動詞分類で内的限界・非内的限界的動詞として限界的であるか非限界的かをしているが，例えば，ここで問題とされる「閉まる」は工藤 (1995)の分類では主体変化動詞であり内的変化動詞とされるが，それでは上記の問題を解決することはできない。つまり，非限界的状況が動詞のみではなく，主語の特性にもより生み出され，そこからこの意味が引き出されるからである。また，工藤 (1995)は非内的限界動詞でも外的限界づけにより（つまり，「学校まで歩く」は非内的限界だが，「2キロ歩く」とすれば限界的になる），限界的となりうると説明しているが，それでは“内的限界動詞”そのものの存在理由が弱くなるし，また動詞分類での分析の必然性が疑わしくなってしまう。

このように，ハンガリー語，日本語ともに，動詞のみではなくその周囲の環境により，状況が意味するものがかわってくることが確認された。ハンガリー語では目的語の数や定・不定，日本語では主語の数により，様々な状況を表わすことが出来ると結論づけられる。

3．ハンガリー語の副動詞構文と日本語の「テイル形」のテキスト分析

ハンガリー語では日本語の“テイル”に相当する明確なアスペクトマーカーが存在しない。即ち，完了的意味を表す場合は動詞の前に接動詞をつける方法があるが，それ以外のアスペクト的意味，つまり継続や進行といったものを表現する場合に形態的手段がないということである。しかし形態的マーカーが存在しないからといって，ハンガリー語において継続的，進行的意味が存在しないということはないと思われる。本調査ではハンガリーの文学作品の日本語訳から“テイル形”を取り出し，それらがハンガリー語テキストの中でどのように表現されているかを調べてみる。

3．1　パラレルテキストを利用した比較調査

ここでは日本語訳のあるハンガリー語文学作品を取り上げ，調査を行った。

対象としたのは以下の3作品である：

『父と子 (Apa és fiú)』（チャート・ゲーザ　Csáth Géza (1887-1919)）：以下，Csáth

『七クライツァール (Hét krajcár)』（モーリツ・ジグモンド (Móricz Zsigmond (1879-1942)）：以下，Móricz

『水浴 (Fürdés)』（コストラーニ・デジェー (Kosztlányi Dezső (1885-1936)）：以下，Kosztlányi

日本語訳は徳永康元 (1998)『青ひげ公の城：ハンガリー短編集』恒文社. 所収のものを利用した。

3．2　結果とその分類

まず，3作品それぞれについて全体の“テイル形”数を取り出し，それに対応するハンガリー語表現を調べた。その結果が 表1である。表中の「不明」は日本語の“テイル形”に対応する表現がハンガリー語テキスト中において見つからなかったという事を意味する。つまり，日本語に訳す際に説明を加える為の意味補填訳のようなものや，言い換えでの“テイル形”であると考えられる。従って表中の「ハンガリー語」の例文数は「日本語」と「不明」の差となっている。

表1：作品と“テイル形”の出現数

作品と“テイル”文数	Csáth	Móricz	Kosztlányi
日本語	18	19	41
ハンガリー語	16	15	30
不明	2	4	11

次の表2は表1における「ハンガリー語」の例がどのような表現形式で出現しているかを調べたものである。

表2：ハンガリー語テクスト内での“テイル形”の出現形式

ハンガリー語テクスト内での“テイル形”の表現形式とその数 ハンガリー語での形式	Csáth	Móricz	Kosztlányi
a) 基本動詞による不完了	5	2	12
b) 状態動詞・存在動詞	4	9	9
c) 自動詞化接辞	2	1	3
d) 反復相接辞	0	0	2
e) 接動詞後置による進行相	2	1	1
f) 副動詞	1	0	1
g) 現在分詞・過去分詞	1	1	1
h) 名詞による言い換え	1	1	1
合　　計	16	15	30

以下では表2に挙げられた具体的な出現形式を順に見ていく事にする。

3.3 具体的な例文

a) 基本動詞による不完了的意味：一般に接動詞が付いていない動詞は不完了的意味を持つ:

(23) 「お昼前じゅう勉強していたのよ」

Egész　　délelőtt　　tanul-t.
すべて　　正午　　勉強する-Past.3.sg.Indef

(Kosztlányi)

(24) 「さっきからいろいろ気をつかったり，動きまわったりしたせいだろう。いつの間にか，母親の頬は，真っ赤なばら色に染まっていた」

Mar　nagy　vörös　rózsá-k　ég-t-ek　az　anyá-m
すでに　大きい　赤い　薔薇-pl　燃える-Past-3.pl.Indef　Det　母-Poss.1.sg

arc-á-n　az　izgatottság-tól　s　a　munká-tól.
顔-Poss.3.sg-Sup　Det　緊張- Abl　そして　Det　仕事-Abl

(Móricz)

b) 状態動詞・存在動詞：tud「知っている」，áll「立っている」や，van「ある，存在する」など:

(25) 「ねえお前，何かおまじないの文句をしっていないかい」

Te,	nem	tud-sz	valami	csalogat-ó	vers-et,
お前	Neg	知っている-2.sg.Indef	何か	騙す-PrP	詩-Acc

(Móricz)

(26) 「笑いながらそこいらに立っているかも知れない」

hogy	kacag-va	áll	majd	előtt-e	a
～ということ	笑う-Con	立っている	あとで	前に-Poss.3.sg	Det
cölöp-nel	vagy	távol-abb	már,		
くい-Ade	又は	遠い-Com	すでに		

(Kosztlányi)

(27) 「お前のポケットをお見せ。はいってるかもしれないよ」

Muta-s-d	csak	a	te	zseb-ed-et	is!
見せる-Imper-2.sg.Def	ちょっと	Det	お前	ポケット-Poss.2.sg-Acc	～も
Hátha	ab-ba	is	van.		
もしかしたら	あれ-Ill	～も	be		

(Móricz)

c) 自動詞化接辞：-ik, -ul/ul など:

(28) 「この紳士の目が涙ぐんでいるのを見て，」

jól	lát-t-a,	hogy	az	úr-nak	könnyez-ik
よく	見る-Past-3.sg.Def	～ということ	Det	紳士-Dat	涙する-3.sg.Indef
a	szem-e,				
Det	目-Poss.3.sg				

(Csáth)

(29) 「私は三日も前からこれを盗もうと思っていたからだ」

Három nap óta készül-t-em ki-csen-ni onnan,
3 日 ～以来 準備する-Past-1.sg.Def Prev-盗む-Inf そこから

(Móricz)

d) 反復相接辞：-gat/get：

(30) 「自分の足をしげしげと眺めていた」

Zavar-á-ban a láb-a fej-é-t néz-eget-t-e.
当惑-Poss.3.sg-Ine Det 足-Poss.3.sg 頭-Poss.3.sg-Acc 見る-Fre-Past-3.sg.Def

(Kosztlányi)

e) 接動詞後置による進行相：Wacha (1978), Kiefer (1994)などで言及されている倒置語順による進行相：

(31) 「教授はポケットに両手を突っ込んだまま，雨降りの往来をじっと眺めていた」

a tanár pedig zsebre-dug-ott kez-ek-kel az esős
Det 教授 一方 Prev (ポケット-Sub)-突っ込む-PP 手-pl-Inst Det 雨の

utcá-ra bámul-t ki
通り-Sub 注視する-Past.3.sg.Indef Prev

(Csáth)

f) 副動詞：動詞語幹＋-va/ve「～しながら」という意味をもつ：

(32) 「或はすでに陳列室に置かれているかは分からんが.....」

vagy esetleg már össze is állít-va, nem vonakod-om,
又は 偶然に すでに Prev ～も 立てる-CONVERB Neg 思う-1.sg.Indef

(Csáth)

g) 現在分詞・過去分詞：現在分詞は動詞語幹 -ó/ő，過去分詞は動詞語幹 -t(ott/ett/ött)がつく：

(33)　「白い陶器のように輝いているこの清潔な解剖室にいると」

el-simul-t　a　tiszta,　fehér　porcelán-ok-tól　csillog-ó
Prev-滑らかになる-PP　Det　清潔な　白い　陶器-pl-Abl　輝く-PrP
boncterem-ben;
解剖室-Ine

(Csáth)

(34)　「床の上の裏返しになっている引き出しに，私は手を出そうとした」

Hozzá-nyúl-t-am　a　fenek-é-vel　fel-fordít-ott　fiók-hoz.
Prev-差し伸ばす-Past-1.sg.Indef　Det　下部-Poss.3.sg-Inst　Prev-逆にする-PP　引き出し-All

(Móricz)

h) 名詞による言い換え：

(35)　「五分ほど黙って待っている間，」

Öt　perc-nyi　néma　várakozás　után,
5　分-Dimi　沈黙の　待つこと　～の後

(Csáth)

3．4　テキスト分析のまとめ

以上の調査を見る限りでは，ハンガリー語テキストに対して，日本語の“テイル形”が使用される場合は，ハンガリー語で基本動詞の不完了的意味をもって表現されてることが多いと言える。ハンガリー語の動詞は瞬間動詞や達成動詞でもないかぎり，一般に不完了の素性を持っているので，このように“テイル形”として使われていると考えられる。これは日本語の“スル形”と“シテイル形”の対立が，完了 vs. 不完了という意味をもっている事からも伺える。そして状態動詞や存在動詞はアスペクト価に中立であり，その為，不完了と認識される。

動詞形態論のレベルでは，他に自動詞化接辞や反復相接辞の使用が見られた。自動詞化接辞は過去分詞をつかったものが受け身の意味合いから他動性を下げるという点で状態的意味となり，上述の状態動詞と同様に，不完了と捉えられ“テイル形”で表わされているのかも知れない。これは“テイル形”などの状態・継続的意味と受動的意味に関連性があることが予想されるが，それは今後の課題としたい。反復相接辞が“テイル形”と結びつくことに関しては，日本語にも同様の例がある（「交通事故で毎年多くの人が死んでいる」は反復的なものである）。

統語論レベルでは，接動詞を動詞から分離，後置させる，いわゆるハンガリー語の進行相構造が見られた。この構造が果たして本当に進行相であるのか，また，他の基本動詞の不完了相との相違があるのかは不明な点が多い。

副動詞をつかった構造は，同様の意味構造をもつものであることから，“テイル形”で表現されやすいと考えられる。ただし，この場合は，両者とも結果持続の意味合いを持つ（つまり動作進行的意味は持っていない）。

4．結　語

本論では主にハンガリー語の副動詞構文について分析した。副動詞構文は一般に動作の結果持続の意味をもっている事が確認された。また接動詞が存在する場合の副動詞構文はそれがない場合の例と比べてモーダル的要素が強い事が分かった。

ハンガリー語の副動詞構文が意味構造的に日本語の“テイル形”と似ている事から日本語の“テイル形”について問題点を挙げ分析してみた。ここでは従来の動詞分類による分析を批判的観点から取り上げた。それに対して本論では，限界 vs. 非限界 という観点から“テイル形”を見てみた。

最後に日本語の“テイル形”がハンガリー語テキストではどのような形式で出現しているか，いくつかの翻訳テキストを利用して観察した。一般に不完了的意味をもつ基本動詞や状態動詞などが“テイル形”によって表わされているケースが多く見られた。本論前半で扱った副動詞構文は結果持続の意味をもつという特徴がこの調査でも再確認できた。

【付記】特に説明のない例文の作成及びそのチェックには一橋大学大学院経済学研究科の PAPP István（パップ・イシュトヴァーン）さんにご協力頂きました。また草稿の段階から社会学研究科の中島由美先生より貴重なコメントを頂きました。記して感謝します。なお本稿の誤りに関しては著者の責任である。

略号一覧：

Abl	ablative	離格	Ela	elative	出格	pl	plural	複数
Acc	accusative	対格	Fre	frequentative	反復相	Poss	possessive	所有
All	allative	向格	Ill	illative	入格	PP	past particle	過去分詞
be	be verb	存在動詞	Imp	imperative	命令法	PrP	present particle	現在分詞
Com	comparison	比較変化	Indef	indefinite conjugation	不定活用	Prev	preverb	接動詞
Con	converb	副動詞	Indet	indetermination	不定冠詞	sg	singular	単数
Dat	dative	与格	Ine	inessive	内格	Sub	sublative	昇格
Def	defininte conjugation	定活用	Inf	infinitive	不定詞	Sup	superessive	上格
Del	delative	降格	Inst	instrumental	具格	1	first person	1人称
Det	determination	定冠詞	Neg	negative	否定	2	second person	2人称
Dim	diminutive	指小辞	Past	past tense	過去時制	3	third person	3人称

参考文献：

Bencédy, Fábian, Rácz, Velcsov (1968). *A mai magyar nyelv,* Nemzeti Tankönyvkiadó, Budapest.

Comrie, Bernard (1976). *Aspect,* Cambridge University Press, Cambridge.

深谷 志寿，ベルタ編 (1982).『昭和57年度言語研修 ハンガリー語テキスト2 ハンガリー語 II』東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所.

Kiefer Ferenc (1982). "The aspectual system of Hungarian", in Hungarian General Linguistics, John Benjamins, Amsterdam.

Kiefer Ferenc (1994). "Aspect and Syntactic Structure". in *Syntax and Semantics, vol.* 27. *The Syntactic Structure of Hungarian,* Academic Press.

金田一 春彦 (1950).「国語動詞の一分類」金田一編 (1976) 所収 むぎ書房.

工藤 真由美 (1995).『アスペクト・テンス体系とテクスト』 ひつじ書房.

Smith, C. (1991). *The Parameter of Aspect,* Kluwer.

高橋 太郎 (1985).『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』 国立国語研究所.

徳永康元 (1998).『青ひげ公の城：ハンガリー短編集』 恒文社.

Tompa (ed.) (1961). A mai magyar nyelv rendszere I.kötet, Akadémiai kiadó, Budapest.

Wacha Balázs (1976). "Az igeaspektusról", in *Magyar Nyelv 72,* Akadémiai Kiadó, Budapest.

【新聞】：Népszabadság, 1994. aug.29 - sep.3.

【電子テキスト】：ハンガリー電子図書館 (MEK (Magyar Elektornikus Könyvtár)):
<http://www.mek.iif.hu/porta/szint/human/szepirod/magyar/csath/>

(1) グロスでは形態素をハイフン - で区切った。また，マーカーの顕在しない語形のもつ情報は，ピリオド . に続けて表記する。複数の文法情報を同時に表わすマーカーのグロスにもピリオドを用いる。

(2) igekötőは「 ige（動詞）に kötő（くっつくもの）」という意味である。「接動詞」は統語論的には独立しているが，意味論的には動詞の派生要素とも言える。

(3) Tompa (ed.) (1961). *A mai magyar nyelv rendszere I.kötet,* Akadémiai kiadó, Budapest.

(4) 新横浜駅新幹線ホームで実際にアナウンスされているそうである（中島，私信）。

(5) 例えば「魚が死んでいる」とは，魚が死んだ結果状態をさすことになるが，それは水槽内にたった一匹（もしくは自分が特に注意していた一匹）の魚が存在している状態の場合である。しかし複数匹いた場合においては結果状態をさすとは限らない。例えば，「魚が死んでいるから，水槽の水質，温度に注意しないと」など。この場合は個々の魚の死ではなく，水槽内の複数匹の魚全体の死をについてである。よって，水槽内の全ての魚が死んで，「魚が死んだ」と言える。